

ニーズレター

(2012年 冬季号)

グループホームネット 香川



もくじ

- 理 事 長 卷 頭 言 (2)
- グ ル ー プ ホ ー ム に 関 わ っ て (3)
- ひ と こ と 雑 記 (5)
- 事 務 局 事 便 り (6)

▼△▼△ 理事長巻頭言 ▼△▼△

研修風景(I)

うちだはかる

1月22日(日)、事務所にて「社会福祉法人 あすなろ福祉会」杉山直義氏にお出でいただき研修会を行いました。参加者は各グループホームスタッフ・入居者・理事合わせて12名。

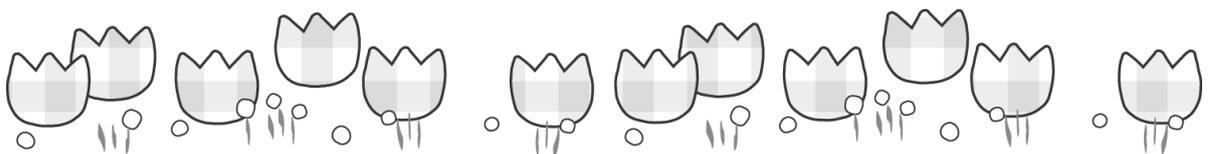
あすなろ福祉会は岡山の繁華街に位置し、S59年「あすなろ共同作業所」の開設から始まり、多機能型事業所として活動をしています。相談の場・居場所・就労サポート・住居としてのグループホーム運営と4つの柱に活動は分けられる。イメージとしては、ピアカウンセリングあり、生活サポートあり、就労サポートあり、交流スペースあり、グループホームあり、家族の集まりなど、そしてそれらの活動を毎月発信している「パル通信」ありと、まさに多機能に活動を行っています。

その活動を報告して頂く事でわたし達のグループホームネット香川に新たな風を取り入れることをねらい、3回シリーズで研修会を行います。第1回として、イタリアの精神保健福祉と題して、トリエステ・ベローナ・アレツツオを訪問し、それぞれの現場では何が起こったかということを紹介していただきました。

イタリアでは殆どが州立の精神病院であった。そこには日本の今と同じように閉鎖的な病院環境があり処遇があった。

1978年に、イタリア国会は革新的な精神保健法を可決したことに始まりました。ご存知の方もおられるでしょう。これをバザーリア法といいます。それは、全国的な地域精神保健システムの施行によって伝統的な州立病院をなくす公約です。このことによって、州立精神病院の正面玄関の閉鎖を決め、新たな入院を防止し、人口15万あたりを責任圏域とし、精神保健局(精神保健福祉センター)を設立し、そこへ病院スタッフを送り込み、グループホームや慢性精神障害者に対しては家のような小規模(20床以下の)長期ケアの場などの設立など。24時間ケアのタイプ、6~12時間ケアタイプそして自立できている人のためのグループホームなど、きめ細かなプランが決められている。

同じように過去に州立病院の閉鎖を行ったアメリカでは、地域での細やかな整備を行わなかったがために多くのホームレスを生み社会問題となったのとは、その風景は大きな違いが観られた。



多くの国は殆どが公立の病院であり、そこは税金の投入がなされている事で、国の取り組みにも違いが見られるという。日本の遅れは50年あるのではという感想でしたが、わが国でも、地域での民間団体の活動で様々な取り組みがなされている事も事実であります。それはべてるの家でありやどかりの里でありアクト活動であり、あすなろ福祉会でありGHNK活動でもあります。

普通に生きていく権利・知る権利・拒否する権利・そして支援を受ける権利など、当事者の当たり前の権利がいかに否定されてきたかに気づき、歩き出している仲間が全国で活動をすでに行っていることを知る事は、わたし達の活動を硬直させない事につながるのだと改めて痛感しました。

今回は、デンマークの状況の研修を行います。多くの入居者や理事の方々の参加を願っています。ご多忙の中、万障繰り合わせて・・・

▼△▼△ グループホームに関わって ▼△▼△ グループホームの運営にかかわって

天満 照美

私がグループホームの運営にかかわったのは、大学を卒業した年だったので今から9年前のことです。当時大学の教授から紹介され何も分からず顔を出したのが始まりでした。

最初は本当に何も分からず、理事の方々が話している内容はチンプンカンで、何でこういふところに顔を出したのかと後悔したものです。理事の方もいろんな職業の方がいて、みなさん個性的な方でした。

今は「グループホームネット香川」という名称になっていますが、当時は「香川 of 精神保健福祉を考える会」でした。ここでは月1回の理事会が行われ運営に関する事が熱っぽく議論されていました。最初は何でこんなこと決めるのに、ややっこしく時間かけるのかな？もっと簡単に決められないのか等心ひそかに思ったものです。ときには人間関係が壊れるのでは？と思われるぐらいの歯に衣を着せないストレートな意見交換でした。おまけに日が変わるのも気にせずの熱の入れようで、何回もついていけない、私には向いていない、辞めようと思ったかしれません。

しかし、常にここで議論されるのは、入居者を中心とした入居者の人権や利益を考えた運営論であり、スタッフや会の運営の利益を追求するだけの内容ではありませんでした。会議をすっぽかしながらも顔を出しているうちに、これだけ真剣に入居者を考えて運営している所ってある？ないよなと思うようになりました。ここで話を聞いているだけでいい勉強になる、下手な研修に出るよりずっとましと思えるようになってからは、会に出て様子をしっかりと聞いたり見たりして、自分の仕事に生かそうと思い始めました。実際今の自分の仕事にはずいぶん役だっています。具体的にどうこう言うわけではありませんが、仕事に対する姿勢やメンバーに対する考え方が変わりました。

また、ここでの運営で学んだところは、理事たちだけでよくわからないときは、すぐに外部からの専門家を招いての研修会を行うなど行動に移す速さです。ホームワーカーの研修も毎月行うし、理事を含めた全体の研修をしっかりとしています。本当に入居者最優先のモデル的なグループホーム運営ができているように思えます。

今までは、運営要綱、就業規則、事務職の細則、ホームワーカーの細則等が完備され、最初は1ヶ所のみグループホームが、現在は4ヶ所までに増えてきました。ホームワーカーも公募して採用するなど、1名の募集に対して数人が応募されるなど魅力あるものになってきているような気がします。

「グループホームネット香川」の運営に参加し、グループホームができる過程を体験することができました。なかなかどこでも学べるものではないと思っています。

これからも運営に対する発言は無理で末端でメンバーさんたちと接することしかできません。しかし、ここで学ぶものはまだまだいっぱいあるし、せっかくの機会なので貪欲に学ぶ姿勢だけは崩さずに持ち続けようと思っています。

地域で暮らすということ

多田 美枝子

グループホームの4号館目として、2008年11月に開所した「ビアーズ百間町」は高松中心部の商店街近くにあり 買い物、交通、病院、銀行、公共施設等、生活に必要な条件がほとんど揃っている地域にあります。その場所で開所時からメンバーさんとの付き合いが始まりました。

それまでは訪問介護員や介護支援専門員として、住み慣れた場所で暮らす方々の在宅支援の仕事をしてきたことから、地域にある一般の賃貸マンションで当たり前の暮らしを側面からサポートすることは、自然なことでした。

縁あって、今までの生活の場から「百間町」と言う地域に住居を構えることになったメンバーさんと平日の昼間だけの住民となったホームワーカー。「生活の場」では実に様々なことが起こります。

夜間や早朝、休日に連絡を受け駆けつけることもあり、内科や外科などへ緊急入院し手術に立ち会ったこともあります。何を食べて、どんな服を着て、どのような過ごし方をするのか、すべて自分の選んだものに囲まれて生活を送っているメンバーさんたち。笑ったり、怒ったり、悩んだり、失敗しながら、いっしょに話し合い、これが「地域で暮らす」ということなのだなぁと、感じています。何があってもそれが当たり前で、特別なことは何ひとつありません。

日々の暮らしの中でメンバーさん同士やワーカーは、お互いに影響を受け、気づかされたり、安心したり、落ち込んだりしながら相互に作用しあっています。もちろん地域で働く人々やそこで生活をしている方々との関わりも見逃せません。他者と関わるということは、自分の内面を見るということかも知れません。

メンバーさんが抱いている夢や希望、やりたいことや目指している事は皆違うけれど、自分のペースで行ったり戻ったりしながら、いつの日か次のステップに行きたくなる時が来るかも知れません。地域で暮らす一人の住民として共に歩んで行きたいと思っています。

▼△▼△ ひ と こ と 雑 記 ▼△▼△

居場所とは

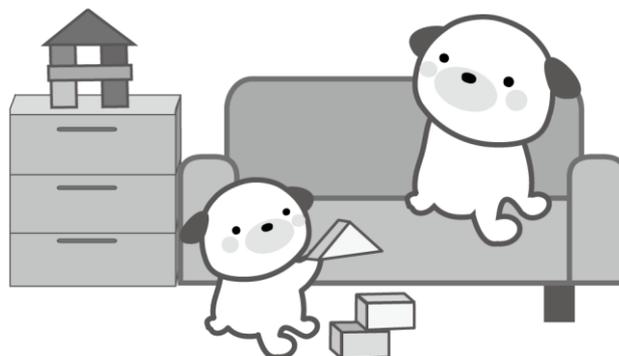
名無しの権兵衛

昔、精神病院のアメニティ(快適な空間)作りを考えた事がある。
居心地よい場所作りである。あれこれと工夫するスタッフを尻目に、
入院者は居心地よいようには見えなかった。

居心地いい場所ってどんな場所だろう。
建物がどんなに立派でも居心地がいいとは限らない。
与えられたものではない事。

子供の頃に押し入れにもぐりこんだとき、
狭く少しかび臭い薄暗い押し入れの中はつかの間の居場所であった事を思い出す。
安全感がある。

だれにも侵されない空間。ありのままの自分をさらけ出してもいい場所。
心置けない人が居る場所。自分を必要とされている場所。
自らが護りたいと思う場所。巢。思い切り背伸びが出来る場所。
思いつくままに・・・



▼△▼△ 事務局 便り ▼△▼△

増田 周作

冬も終盤、この冬は雪の多いように感じました。しかし、僕が小学生（30年ほど前）の頃を思い出すといたって普通の寒さのようにも思えます。

今回は、前回に引き続きグループホームに関わってということで、理事とホームワーカーに記事をお頼みしました。関わる長さや密度、立場が変わってもお互いに影響を受けるという相互作用がそこにはあるように感じました。

1月にグループホームの入居者と中津万象園にある丸亀美術館に星野富弘さんの「花の詩画展」に行ってきました。僕は、今回行くことになって、恥ずかしながら、初めて星野さんの存在を知ったのですが、もとは中学の教師でクラブ活動中に頸椎の損傷で手足が自由に動かせなくなり、リハビリで口に筆を加えて、絵を描き始めたという方です。

行く前に、インターネットやパンフレット、先に見に行った人が買ってきたポストカードなどを見ていましたが、作品を生で見てその色彩と筆使いに見入ってしまいました。

絵が下手な僕は、「すごいなあ〜」と唯々感心するばかり、海外でも個展をひらくこともあるようで、詩や題名に英語訳もついていましたが、細かなニュアンスが通じるかどうかと思いました。

詩には、手足が動かなくなってからの苦悩や日常の中にある幸せなどが書かれており、絵も花の絵ばかりではなく、日々の日常を切り取ったようなものもありました。

ありがちな感想ばかりで、申し訳ないですが、行くことができてよかったと思いました。行こうと提案してくださった入居者には感謝しています。

ちなみに、中津万象園も僕は今回初めてゆっくりと庭園を見て、近くにあるのに知らないということはもったいないと思いました。

グループホームネット 香川

(発行) 特定非営利活動法人 グループホームネット香川

連絡先： 香川県高松市円座町1124番地6 入屋工務店2階

TEL : 087-885-5270

Fax : 087-887-5955

